

# 社説 1975.8.25 京都

## 核軍縮とパグウォッシュ会議

シニントン、米国防長官の訪日と  
まきで待たせられた。この二十  
八日から五日間、京都国際会館で第二十  
五回「パグウォッシュ会議」が開催され  
る。この京都シニントン会議の主題は  
「完全核軍縮への新しい構想」で、サ  
タイトルに「科学者および技術者の社会  
的機能」となっており、日本の湯川朝  
永博士をはじめ海外からの科学者數十  
人が参加して、核兵器の廃絶をめざして  
具体的な討議を行う。

核兵器の原形ももたらさる。長崎  
の被爆から三十年一として、はじめて原  
水爆禁止と核拡散防止の運動が結核した  
折でもあり、パグウォッシュ会議が日本を  
開かれる意義は大きい。それをもまじ  
てシニントンの主題が同会議を来の中  
心テーマである。核兵器をめぐって諸  
種あるものに引き続いて、はじめてこの  
討議を行うことになった。意味は重要  
で、その成果は世界の舌を驚かす。

いっしょでもな。この会議は、ソ  
ンが激化して一九五七年夏、ラッセル・ア  
インシニントン宣言に呼びかけ、カナダ  
東南部のパグウォッシュに二十一人の世  
界の科学者が集まり、原子エネルギーの  
利用の結果起る障害の危険も核兵器の  
管理、科学者の社会責任等について第  
一回の会議を開いたのが始まりである。

以来、世界各地で二十四回の会議を重  
ね、多くの提言が発表されてきた。  
しかし、会議の規模が大きくなり、核  
兵器廃絶の具体論を進められて、核  
時代におけるさまざまな問題を避けて通  
るわけにはいかなかった。食糧や人口問題、エネ  
ルギー問題、あるいは第三世界の諸問題な  
どの討議で、ともすれば本筋の問題がほ  
ぼほぼぼと消滅を生じた。そこで、核戦  
争の危険意識がよりの現実的となった。こ  
うして、テーマを完全核軍縮に絞って本論を  
立て直していったのである。

この会議は、シニントン後の世界情勢  
の中で、核兵器の先制使用や戦術核戦争  
に強い姿勢を示しているシニントン  
国防長官が、極東防衛をめぐって米日  
同盟の強化を求め、この会議の  
いっしょの白紙化が予想される。

急テンポで進む核競争  
と、この会議が、核競争の危機はど  
うか。日本はじめ世界各國の真剣な原水  
爆禁止の動きにもかかわらず、核兵器の増殖が  
りはますます進んでいる。米国の民間  
機関ではあるが、権威ある国防情報セン  
ターの資料では、いまも米国は約三万発の  
核兵器を世界に配備している。戦  
略核兵器は、戦術核兵器二万二千発  
で、特に戦術核兵器は過去四  
年間で一日三個の割合で生産してき  
たとはいわれ、このままでは昨年ウツ  
オストク会議で合意された制限のもとで  
も、一万二千発を保持し続けることになる。わ  
る。一方、ソ連の戦略核は千八百発  
で、一日二個ずつ、戦術核は米国の  
半程度と推測されているが、いずれに  
しても、米ソがこれらの核を用いれば、そ  
れぞれ相手を手を五十回以上反復して破壊さ  
せることができる。

これは、核戦争の戦術核も、損害額は広  
島、長崎などと比較にならない。NAT  
O軍の想定演習で示されたものは、二日  
間で三百三十五個の戦術核による死者  
百五十万七千人、負傷三百五十万人  
で、第二次大戦中のドイツの人的損害  
（死者二千五千人、負傷七十八万人の  
約五倍という数字になった）より、また  
都市に核攻撃を加えられれば、百万二  
千万人、ヨーロッパなら死者一億とい  
う事態もあり得るとされている。恐ろし  
いのは、この限りではない。核兵器の  
使用は無限にエスカレートし、限定も全  
面核戦争も混乱の中では区別がつかなく  
なり、先制攻撃の誘ひなどは無意味な  
ものになってしまっている。

これらの核兵器の配備は、いまも米ソ  
両国だけではない。十指以上の国があ  
り、それらのすべてを原形型に換  
算すると、百万個以上の核弾頭が地球  
上に存在し、全地球を射ると北半球は完  
全に破壊される事態をばええる。一方、  
こうした核の蓄積に加えて、核拡散が重  
要な問題として登場してきた。インドの  
核実験以降、イラン、韓国、台湾、  
南アフリカなど小国も、核に興味を寄せ  
はじめ、それが一種の「スリー・スマン・シ  
ン」現象を起しているという現実があ  
る。ほとんどの国に核兵器保有の  
潜在能力があるといわれる今日、こ  
うした個々の、地球の未来に暗い影をな  
げかけるのを、深刻な事態を招いてい  
る。

核廃絶の風土づくりを  
さ。パグウォッシュ会議事務局長  
のR・T・フェルトが「核兵器の保有は、  
工科大学で学ぶ」と「核兵器の使用は、  
確率は、一九八四年までが三分の一、  
二〇〇〇年には二分の一」といって予  
測も、核競争への危機は、一歩一歩近  
づきつつある。にもかかわらず、最近の  
世界的な現象としては、核兵器の運用や  
事故、核ジャンプなど一部が心配される  
以外、核とは使えぬものとして、た  
核への、傾れがみられる。こうした  
り、この風でも今回の会議の成果が期待  
されるゆえである。

また、シニントンでは日本側から東  
大の坂本義和教授らが、全体的な軍縮に  
関しては、まず米ソが過剰核兵器を減ら  
すことが突破口を開くという提案を行  
うといわれる。事実、これの二大超大国  
は過去、幾度となく核競争回避への協定  
や合意を繰り返しながら、核兵器の充実  
をはかり、核拡散防止条約でも重要な部  
分に違反し、条約の基本精神に反する現  
象を繰り返している。SALTの交渉でも、  
ミサイルの数量に上限がつけられて、  
命中精度の向上など質的な面には、なん  
ら制限のないことを求め、核軍  
縮が前進していると思えたりしては明ら  
かである。こうした状況下で核兵器廃  
絶を目指すことは、想像以上の困難であ  
る。だが、核競争が平和の均衡をもたら  
すというこれまでの議論も、次第に低下  
しつつある。むしろ、一歩一歩核兵器  
廃絶とかなんか、核兵器の重要度が  
低下する。これは世界的な風土づくりを  
行っていくことは可能である。

われわれがパグウォッシュ会議で期待  
するべきは、核競争が平和の均衡をもち  
、核兵器の重要度が低下する。これは世界的な風土づくりを  
行っていくことは可能である。

c092-17-039